



Title	【書籍紹介】並木誠士著『近代日本における「絵画の変」：洋画の流行からデザインの導入まで』
Author(s)	松原, 史
Citation	デザイン理論. 2026, 88, p. 102-103
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106194
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【書籍紹介】

並木誠士著

『近代日本における「絵画の変」
——洋画の流行からデザインの導入まで』

思文閣出版 2025 年

松原 史 北野天満宮 北野文化研究所 室長

本書は、近代日本における絵画をめぐる変化を「絵画の変」ととらえ、その絵画を取り巻く変化の様相を東京と京都の比較を通じて、俯瞰的視点から描き出したものである。我々が今当たり前だと考えている「絵画」の常識、現代へ続く「絵画」概念とその鑑賞方法が確立したのは明治、すなわち近代のことであった。床の間ではなく、博覧会や美術館という広い空間の中での展示と、それに適した絵画の誕生は絵画史においても一大事件であったといえる変化である。

著者は、12 世紀・16 世紀・19 世紀を日本絵画史上の大きな転換点として位置づける。12 世紀には「やまと絵」の確立とともに肖像画や記録としての絵巻作品が登場し、16 世紀には、狩野派の隆盛や床の間空間の成立、中国絵画の受容や風俗画の成立が起こっている。それに続く第 3 の変革期として本書では 19 世紀を提示する。

12 世紀は貴族から武士の時代への転換期、16 世紀は戦国時代の混乱期、そして 19 世紀は開国による新しい文化の急激な流入期であり、いずれも社会の大きな転換期に絵画の常識もまた大いなる変化を遂げたと見ることができる。また近代の絵画史に関する既存の研究成果が、東京を中心として展開しがちであることへの問題意識から、東京と京都それぞれでどのような出来事が起こっていたのか、東西二つの磁場を考察の対象とし、今まで見落とされてきた観点を明らかにしようとしている。近代絵画の変化をめぐる主要な要因の一つは、博覧会や留学、御雇外国人を通して知った異文化、すなわち洋画の流入・受容であった。その

受容の仕方に関しても東京と京都は違った展開を見せている。

第 1 章では研究史と時代背景を概観し、第 2 章では画学校や教科書の成立過程と「洋画」の受容とそれに伴う「日本画」の成立を、東京、京都それぞれについて詳しく明らかにした上で比較している。東京では政治的な状況も反映しつつ日本画と西洋画がせめぎ合うような状況が垣間見られ、京都では地場産業との兼ね合いが強い点が東京と異なる絵画のあり方としてある中での洋画の受容の様子が詳しく読み解かれており、公的教育では日本画、在野の私塾では洋画という状況が長く続いたことが明らかにされている。歴史をはらむこの東西の相異は第 7 章で詳しく明らかにされる図案教育・指導にも現れる。

第 3 章では日本における博物館・美術館の成り立ちが丁寧に紐解かれ、第 4 章では文部省が主催した日本で初めての官設の美術展覧会である文展の設立に至る美術界の動向や顕在化した問題（審査員問題）を明らかにしている。第 5 章では近代絵画に欠かせない西洋からの新知識としての「写真」という概念、そして写真と洋画との間の「写真」優位性へのせめぎ合いなどが論じられ、第 6 章では近代ならではの主題として「裸体画」、「歴史画」、「戦争画」の 3 画題に関して考察されている。そして最後の第 7 章では、京都で中世より培われてきた工芸下絵・意匠が、近代以降「図案」から「デザイン」という概念へと展開していったことが丁寧に読み解かれている。

全体を通じて、画学校の設立や教育課程の変遷、

教科書の内容など、画家の思想や作品からだけでは見えてこない点を大いに検討し、目にみえる変化の陰にある構造を明らかにしている点も本書の特徴といえるだろう。

特に印象的だった個別事象に関して少し述べると、本書では絵画史における急激な変化を「絵画の変」と表現しているが、近代において短期間で入れ変わる洋画と日本画の優位性の攻防や、洋画、日本画両グループ内での新旧勢力の攻防、丁寧に読み解かれた各陣営、各画家、各政治家、各学者らの離合集散のさまは、まさに戦国時代を思わせる様相を呈している。政治も社会も大いに揺れた近代、定まる前のカテゴリー、新時代に向けた各人の前向きな努力が臨場感を持って伝わる。また第5章で写真と洋画の写実の価値に関して、写真は数年もすれば薄れてしまうが、写真を撮ってそれを油絵にして色彩豊かに思い出を保存すれば一生家族（家人）の姿を残すことができるという理屈で、写真に対する油彩の「本物そっくり」優位性を強調していた時期があった点も当時の認識を示す大変興味深い事例である。

第6章では有名な裸体画論争の背景に展開していた様々な画家と時代のせめぎ合いが実態を持って解説されており、第7章では浅井忠をはじめとする渡航者らが持ち帰った実資料が現場に与えた

インパクトと示した方向性への考察、時代が意匠からデザインへと突き進んでいった様子を垣間見ることができる。

本書の構成上注目されるのは、末尾の総括にて、本書の縦糸が浅井忠の軌跡を通して捉えられた近代であったことが改めて明かされている点である。読者は近代の絵画史を追いつつも、浅井忠という人物の一生と仕事を辿っていたことに気付かされる。幸野煤嶺、竹内栖鳳などの日本画家、田村宗立、黒田清輝、高橋由一ら洋画家、中澤岩太、森鷗外ら学者等、各界の著名人が多数登場する本書においても、浅井忠の京都移住が京都洋画壇に与えた影響を重視する著者の視点は、本書全体を貫く重要な軸となっている。

東京と京都を比較しながら近代絵画史を叙述する本書は、同時に浅井忠を媒介として近代の変化を描き出している。近代絵画史を東京と京都という二つの軸から把握すること、そして浅井忠を中心に据えて論を展開することの可能性と限界については議論の余地を残してはいるが、時間軸と共に、東京と京都という二つの地域軸に沿って丁寧に読み解かれた近代の絵画史の変遷は、絵画史・工芸史・デザイン史を研究するものにとって必読の書であるとともに、近代絵画史研究に新たな視座を提供する著作であるといえるだろう。